いざ、秘境へ

１週間以上、水の都新潟に滞在したバードだが、ついに去る時が来た。
ファイソン夫妻や、長い毛の犬を伴った外国人金髪の子供まで見送りにきたものだから、
野次馬や見物客がぞろぞろととついてきた。みな、帆船に乗ったバードに手を振りながら
別れを惜しんでいる。
この先は、外国人が足を踏み入れたことのない、未開のの地。どんな旅が待っているのだろうか？ファイソン夫妻はルースちゃんと一緒に、運河をゆっくり進む舟について歩いてきた。やがて、帆船は信濃川の本流に入り、スピードをあげた。
「わたし、どうなってしまうのだろう？生きて帰ってくることはできるのだろうか」
遠く小さくなるファイソン夫妻とルースちゃんの姿をみながら、バードの胸は、淋しさと不安に包まれた。

船は信濃川を横切り、新川を経由して加治川に入った。加治川の源流は飯豊川とよばれ、飯豊山から流れ出している。遠くに見える飯豊山の雪はまだ溶けず、美しい姿を見せている。飯豊山に見とれていたバードの鼻にプ～んという異臭が漂ってきた。

「イトー、何なの、このにおいは？」
「わかりませんか？これはバードさんも毎朝出しているものの臭いですよ」

「おー、シーット！」

「その通り、人糞です」

イトーは、回収システムを説明しだした。

「わが国では、人から出て来る不要物は、大変貴重な肥料です。ですから、都会からはひとかけらも残さず、田や畑に運ばれます」

「へー、だから江戸も新潟も町はとてもクリーンなのね」

「そうです。都会から運ばれたあと、いったん土に埋められた大きな壺にためて、発酵させるのです。そうなると、においも少し甘くなり、これほど強烈なものではなくなります」

鼻をつまんだルーシーの目には、川沿いの畑が映っている。

「そうか。この立派なメロンもキュウリも、私達が食べて消化して残ったものを肥料にしているわけね。このにおいを除けば素晴らしいシステムだわ」
「あとひとつ、田や畑には地面すれすれに肥溜めがあるので、うっかり落ちないようにしてくださいね」
そういうと、イトーはルーシーにウインクをしてみせた。

木崎で人力車に乗り換え、黒川で一泊した。一晩中雨が降ったせいで、道はドロドロだ。
今やルーシーたちは、大きな山岳地帯に入っている。家は貧弱で、男たちはふんどしひとつ、女たちは胸元がおおきく開いたシャツとズボンという姿で過ごしている。
「みんな、プアーね」
荒川沿いの道はますますぬかるみ、人力車は走れなくなった。
一頭だけみつかった馬に荷物をのせ、自分たちはトボトボ歩いていく。
大雨の中、ルーシー達が着ているのは油紙で作ったカッパ。

「私たちの着ているカッパも、けっこう貧しいわね。人のこと言えないわ」
そんなことを思いながらたどり着いたのは、沼という集落だった。
坂道の下には増水した川が流れ、その水が入らないよう家のまわりに土嚢を積んであった。
一軒の粗末な宿屋に入った。出迎えたおかみさんは
「悪いんだども、ここはとても汚くて、みなさんのような立派なお客様には、とうていふさわしくありません」
と嘆いた。
その通りだった。泊ることのできるたったひとつの部屋は、梯子をのぼったところにあった。窓はがたがたしており、火鉢には炭がなく、雨に濡れた着物を乾かすのにも困った。食料といっても卵ひとつあるわけではなし、米は汚く、小さな黒い実が入っていて、本当に食べられるかしらと思う。
しかし、ここから先に待っているのは険しい山々だ。休まなければならない。
一夜明けると、ルーシーの泊った片倉屋の前には、村人たちがぞろぞろ集まってきた。
誰も外国人を見たことはなかった。
「髪の毛も目玉の色が違う女が泊まってんだと」
「夕んべなは鶏をつぶして食ったんだと」
「おら、おっかなくて寝らんねがった」
ルーシーをひと目ようと、宿屋の入り口は雨にも関わらずごった返していた。
ルーシーがイトーに言って調べたところによると、沼には二十四軒の家があり、三百七人もの人が住んでいる。ある家には世家族も同居している。

バードは、イトーがようやく探してきた馬に乗った。村人達から歓声が上がる。

「女のくせに、馬にのるんだ」

「落ちんなよー」

「峠は険しいから足元に気をつけてなー」

目指すは、越後街道（米沢街道）１３峠だ。駄馬はまことに頼りなく、２人を乗せてとぼとぼ歩き出した。